

## 第10期県民生活審議会 第3回総合政策部会（概要）

- 1 日 時 平成26年12月18日（木）10:00～12:00
- 2 場 所 パレス神戸 大会議室
- 3 出席者 委員：鳥越会長、小西副会長兼部会長、岩木委員、木田委員、北川委員、北野委員、玉谷委員、野崎委員、服部委員、原委員、森委員、山口委員、山崎委員、山下委員、吉田委員  
県側：藤原政策部長、横山企画県民部参事、柳瀬県民生活局長、瀬上県民生活課長、中田県民生活課参事、木村協働推進室長、久戸瀬県民生活課副課長、県民局・県民センターほか関係職員

### 4 内 容

#### (1) 政策部長挨拶

- 11月21日に地方創生関連法案が国会において可決成立した。地方創生の取り組みを着実に進めていくためには、地域の豊かな自然環境や人間関係、地域により育まれた人の美德、地域社会での人と人との支え合い、そして、ふるさとへの愛着に立脚した生活や、心の豊かさなどを基軸とした生活が大切ではないかと考えている。
- 県民一人ひとりがふるさと意識に根ざして地域に関わり、地域の担い手となっていかなければ、地方創生はなし得ないのではないかと認識しているところである。
- これまで「ふるさとづくりの広がり」をテーマに、多様な地域資源の活用や、次代を担う若者たちの地域参画の促進といった、県民生活の視点からふるさと意識を通じた兵庫創生の基盤となる視点やキーワードをご示唆いただいた。
- 本日は、これまでのご意見等を再整理し、組み立て直した形で、提言の骨子案を資料としてお配りしているのので、これをたたき台としてご審議いただき、新たな兵庫のふるさとづくりの提言の骨格が明らかになれば幸いである。
- 本日の審議内容を踏まえ、来年の5月頃には提言案をお示しできればと考えているので、よろしくお願い申し上げます。

#### (2) 審議事項について

##### (部会長)

- これまでの全体会・部会での議論を踏まえて骨子案を作成した。これをたたき台として審議をしていきたい。

##### (資料説明)

- 事務局から資料に基づき説明

##### (部会長)

- 資料のように骨子案をまとめているが、これは最終形ではない。今日いただいたご意見も合わせて提言案をまとめていきたいと思っている。

#### (3) 意見交換

##### 〈整理が必要な項目〉

- 「ふるさと意識を広げる」の項目はもう少し整理をした方がいいのではないかと。「多様な価値観や個性を地域で受け入れる」や「若者の新しいチャレンジを見守る」を、

「あいさつ等によるつながりの創出」や「支え合いの推進」と一緒にするのは違和感がある。

- 「課題を知り自分にできることを考える」を、「体験活動を広げる」「地域の魅力への理解を深める」と一緒にするのは違うと思う。これは「知る」の次のステップではないか。また、「地域資源の発掘・再発見」が新たな価値の創造だとすると、それも「知る」の次の話ではないかと思う。
- 新しい人を受け入れていく中で、地域のつながりを豊かにしていくべきとのご意見もあったので、「支え合いの推進」や「多様な価値観、個性を地域で受け入れ」を入れさせていただいた。また、「地域の課題を知る」「新たな価値の創造」は、少し踏み出した次のステップも入っているかもしれない、そこは整理をしていきたい。  
(事務局)
- 「コミュニティのメディアで地域の力を強化する」と言うときに、「地域内での情報共有のツール」と「地域に人を呼び込むための外に対する情報発信」との両方があると思うが、そこは整理すべきとの印象を持った。
- 情報発信は、基本的には地域内の循環だが、結果的にそれを通じて外から呼び込んでくる効果も期待しているところである。(事務局)
- 今までと違う方向の新しいふるさとづくりということだが、「これからの」や「新しい」をつけるのは難しいと感じている。そうであれば、前文でなぜこのような事を考えたのかを明確に打ち出すことが必要ではないか。そこに今まで議論したエッセンスを入れることが大事である。
- 「ふるさとづくりの具体的方策」の図表がわかりにくい。「意識を広げる」と「関わりを広げる」ことが循環のイメージになっていない。この2つの区別は難しく、関わりを広げる具体的な話が意識の方に入っていたりしている。循環していった相乗効果をあげていくことをもう少しうまく表現した方がいいと思った。
- 「地域コミュニティを取り巻く状況」の中で、現在の課題に書かれていることは地域福祉の将来をうらなうときに使われる言葉であり、将来の萌芽と書かれていることは、地域活性化の話をする時に出てくる言葉で、その2つをひっつけて「ふるさとづくりの推進」とするのは難しいと思う。
- 「ふるさとづくりの推進」に至る前に、「地域と暮らしの一体化」や「地域課題と暮らしの一体化」といった言葉があった方がいいのではないか。
- 「ふるさとづくりの具体的方策」ではなく「地域と暮らしの一体化の具体的方策」とすると分かりやすくなるのではないか。いきなりふるさとづくりと走ってしまうと、なかなか理解が届かないような気がする。

#### 〈企業や事業者などをキーワードに盛り込む〉

- コンビニに協力してもらって地域防犯の駆け込みの場所にしてもらうなど、このような取り組みをするときに、主要な存在として出てくるのは具体的な事業者であるが、ここではほとんど触れられていない。
- 神戸市は小中学生がバスを降りるとき、運転手に「ありがとう」と言いお互いに声を掛け合う。抽象的にあいさつをしましょうではなく、例えば改札でおはようございますと声をかける駅員にあいさつすることもひとつかと思う。

- 事業者や企業を主要なアクターとして、キーワードで入れていただきたい。事業者との連携を具体的に盛り込むと、踏み込んだものができるのではないかな。
- 文章中の主体の誰が、誰のために、どこでやるのかがぼやけているので意見の行き違いが出てくるのではないかな。どこが発信しているのか、誰のためにあるのかを整理すると、そこに企業県民や事業者などの枠が生まれてくるのではないかな。

### 〈地域と地域コミュニティを分けて考える〉

- 地域コミュニティは1つのものとして考えずに、地域と地域コミュニティを分けて考えてはどうか。
- 自治会では、災害や地震などにおいては、地域コミュニティが非常に大事だと常々言っているところであるが、地域と地域コミュニティを別々にということであれば、地域とはどのような中に入るのか。
- 小学校区のまちづくり協議会あたりまでを地域コミュニティと捉える場合が多いが、「播磨地区」といったような広がりを持って考える必要がある。軸になるのは地域コミュニティであるが、例えば加古川では上流から下流まで結びつくといった伝統もあり、相互連携の必要性からも地域・地域コミュニティと分ける方がいいと思う。

### 〈活動する人を広げる〉

- ボランティア活動では、活動はしたいが運営はしたくない、つまり面倒くさい部分はしたくないという意見が40代から下ぐらいに出てきている。地域活動は面倒くさいものといった印象があるので、そこを何とかしていけないかと思う。
- NPOについて、活動資金をもらうために最初に立ち上げた時の理念からぶれている団体がいくつもあるが、ぶれない活動が必要であり、そのためにその人たちにマッチした活動をしていただく、それで補助金を出すことが大事ではないかと思う。
- 地域でいろいろな人が楽しそうなことをしているのは感じるが、その宣伝方法は広報やホームページといったツールが主で、それを見なければ伝わってこない。もう少し宣伝方法を考えて、いろいろな人に知ってもらえたらいいと思う。
- 若者に特化しているようなイメージがあるが、高齢者や子育て世代、若者などいろいろなことにチャレンジできる仕組みが欲しい。その上でソーシャルビジネスに繋がる、自分の存在価値を見い出せるような仕事が見つかればいいと思う。

### 〈「居場所づくり」がキーワード〉

- 居場所がこれからのキーワードになるのではないかな。今はほとんどが行政の縦割りで、高齢者や障害者など属性を固定化して居場所を作っているが、本当の地域の居場所とは、いろいろな人が集えるような場所があって、それが人と人とのつながりを豊かにしていくことだろうと思っている。
- 属性にとらわれないような居場所をどうやってつくるかが課題だと思う。

### 〈人材の「養成」「育成」について〉

- これまでの施策でしてきた「養成」は、人材を育成して、その人を地域に投入するというイメージが強いが、そのような形の「養成」はほとんど機能しないとの実感を持っている。
- 「養成」は、地域活動の力量をアップしていくという表現が適切だと思う。個人を

育成して投入するのではなく、活動の場そのものを支援して運営するプロセスをサポートするような施策が必要だという発想をしていかないと、「養成」という言葉がちりばめられている所でしょうとしていることは実現できないのではないか。

- 「人材育成」という言葉は、「自発的に人が動く」「自発的に動く人をつくっていく」「自発的に動く地域をつくっていく」という視点が大事かなと思う。
- 何か事業をした時、行政には結果として何人集まったかを求められることが多い。声をかけて今まで機会のなかった人が出てくることも大事だが、自発的に参加する人を増やしていく方が大事なのではないか。「気づき」や「自発的に」といったキーワードが入ると、そのような人たちを大事にする政策が生まれてくると思う。
- 県政として「養成」する組織が大切だと書けるが、「養成」と書くのをやめた時にどうするのか。「自発」や「気づき」といった言葉に変えただけでいいかということ、それは違うと思うので、きちっと検討しなければいけない。
- 「人材育成」ではなく「その人の持っている可能性を引き出す」「人と人とが響きあう」「年齢の近いところで響き合う」などもいいのではないか。
- 「養成」とは現場と遠いところで人がつくられるイメージがあり、「現場で活動している」「そこで人が関わり合いながら力をつけていく」といった、活動と一体化した中で人が育っていく発想でサポートしないと、人を集めて養成して、育ったから地域に入って活躍しなさいという構造では機能しないのではないか。
- 「養成」とは枠や型の中で都合よく育てるイメージだが、行政や中間組織などがルールを定めて、その中で自由にやってください、と言えればいいのではないか。
- 1つ目は近いところで作る。「養成」ではなくて、近いところ・その現場で作る。2つ目は、枠があるという発想はやめて、ルールをつくっていく。この2つでいけるのではないか。
- 「育成」ではなくて、「共育ち」や「育ち合う」といった、共に育ち合っていくイメージの言葉を使い、高齢者も子どももみんな共にそこで出会うことで育ち合っ地域をつくっていく、といった発想はどうか。

#### 〈「若者の新たなチャレンジを見守る」表現について〉

- 若者の新たなチャレンジを地域で見守り失敗も受容するというのは、若い人が自分の発想で、自分のやりたいことがやれるように地域としてさせてあげましょうぐらいの表現が適切で、それ以上に「見守る」というのは言いすぎではないか。上から目線ではないかとの印象を受けた。
- 上から目線という印象があるのは、バックに流れている考え方が言葉の端々に出ているからではないか。高齢者は、豊富な経験知識を持ってカムバックという力量を評価した表現だが、若者になると見守って失敗も受容しアドバイスまでしようとか、対等ではない感じが散見される。
- 地域のプレーヤーとして、高齢者も若者も現役世代も子育て世代もいろいろな人たちが多様に対等に関わることが実現したいにもかかわらず、高齢者は即戦力として能力を発揮して、若者は助けてあげないと出来ないというトーンが透けてしまうことが気になる。その辺りの工夫が必要かなと思った。
- 「地域で見守り失敗も受容」とは、積極的に地域で若者にチャレンジを促し、任せ、

協力するということかと思う。高齢者の作った地域活動の枠組みに入ることに若者は魅力を感じないので、任せるからやってみ、手伝うよということに繋がる表現の方がいいのではないか。

- 「見守る」という言葉は上から目線かもしれないが、言い方を代えれば若者にチャンスを与え、私たちもそれに対して利用していくことになると思う。お金を払えば責任と権利が公平になり、お金を払っている以上ちゃんとしてよと言えるので、若者が育っていくのではないか。

### 〈若者を活動に巻き込む〉

- 最近、活動に参加する大学生が増えた。ちょっと社会経験があつて、卒論の指導もできるような30代の年の近い若者がまとめていく中で、どんどん増えていったのではないかと思う。
- 地域に住んでいる人たち、あるいは大学時代を送っている人たちを、どのように巻き込んでその場所を好きになってもらうかということは、私たちの世代ではなく、もうちょっと下の世代の人たちに頑張ってもらう方がよりいいのかなと思う。
- 前回の部会で若者にお話いただいた時も、あの方たちの所には高校生や大学生が集まってきているとのことだったので、年配の人たちより、年齢の近い人が一緒になって何かしていくことを考えるのも必要かと思う。
- 高校の校長先生が生徒を地域に出そうとしてくれていて、祭りや消防の出初め式などにも来てくれる。高校生は素晴らしい力を持っている。みんなでまちを盛り上げ、お互いに知恵を出し合えば地域が元気になり、ふるさとにはよかったという思いを30年、40年後抱いてくれるのではないかなと思う。

### 〈若者のソーシャルビジネス〉

- 若者を起爆剤にしたり、チャレンジしてもらおうと思ったら、収入はすごく大きい。自分の仕事を探しにふるさとから離れていくことがあるので、チャレンジ支援をするなら、ビジネスにつながる事が大切である。
- 行政の若者支援では委託事業を考えるとと思うが、それでは儲けることが出来ない。頑張った分だけお金がもらえるというチャンスがないと、それをしようとは思わないのではないか。今の枠組みだと、委託事業が終わった瞬間に自分たちはどうしていいか分からなくなる。
- ソーシャルビジネスのチャンスは地域の中に広がっている。介護や医療の学校も増えており、高齢化率が高い地域にこそお客さんがたくさんいる。その方々が若者の事業に対してお金を支払う仕組みを作れば、若者が地域に入っていくのではないか。
- 若者に委託事業の仕組みでお金を渡すのではなく、お金が動いていることを見せるのがひとつかなと思う。例えばクーポンであるとか、自己負担率を残す形にしていけば、自然に自分たちの事業としてランディングしていけるのではないか。
- 若者が地域のふるさと納税の商品をソフト面でもハード面でも開発し、そこに納税していく仕組みができて、国と市町のシステムの間にもうまく県が入れたらすごく面白いと思う。

### 〈地域で子どもたちを育てる〉

- 大人がなぜあいさつ運動をするのか子どもたちはわかっていない。保護者も言われたからあいさつ運動に行くといった面がある。その意識づけが大事である。
- 子どもたちは、自分の住んでいる、例えば神戸市〇区という地域にはつながりを感じているが、兵庫県の事はほとんどわかっていない。
- 子どもに「知らない人についていってはいけません」と親は言うが、親の知らない人と子どもの知らない人は違うのではないか。親は知らなくても、子どもは知っているからついていくのかもしれない。その辺りも考える必要があると思う。
- 子どもは地域で育てなければどうにもならない。「どこの子どもか」ということを地域のみんなが知っていれば自然とあいさつはし出すし、「知らない人に返事をしてはダメと言われている」ということにはならない。
- 子どもが元気になれば、おのずと親も元気になる。子どもは地域で育てるわけだから、高齢者にみてもらったら、子どもから高齢者まで元気になり、その中でいろいろな経験を教えてもらえるのではないか。
- 教育と地域のギャップが大きい。地域が思っているほど教育の分野では子どもを地域へ出そうとしない。幼児教育の段階から、今の県の教育委員会がどのように教育に取り組んでいるのかを聞いた上で、地域としてどんな子どもたちを育てるのかを考えるべきではないか。

### 〈中間支援組織づくりについて〉

- 中間支援組織づくりとは、地域住民の活動を中間支援するための組織を地域住民でつくるという意味なのか。
- 中間支援組織は、震災以降ボランティア活動を支援するための組織が必要とのことでNPOを中心につくられてきた。また、NPOを支援するNPOということでもボランティアプラザを通じて定着してきた。ただ、地域コミュニティ・地域団体を支援する中間支援活動がこれからの領域ではないかとのことで書かせていただいた。(事務局)
- 中間支援組織の担い手というのは、NPOのようなものをイメージしているのか。
- NPOもあるし、地域住民が自ら中間支援的なことをやっていくことも十分考えられる。企業もあるかもしれない。(事務局)
- 中間支援はすごく高度なことなので、それを地域住民の中で組織化せよということが果たして現実的なのかと思う。むしろ行政が力量を持ってやっていくとか、力量を持ったNPO等に役割を担ってもらう方が現実的かなと思う。
- 広域的な地域団体も十分中間支援的な役割を持つのではないかとの意味もあり、NPOだけではないというニュアンスで入れさせてもらっている。(事務局)

### 〈行政の役割〉

- 誰もがこういっただけをしなければならない、という事は分かっているが明文化されていない。そこが泣き所だと思う。きちんと明文化してリードしていくのが行政の仕事であるが、行政でもなかなか出来ていない。私たちはそれをして欲しいと思っている。

### 〈今後の検討方向〉

- 県民意識調査は対象が県内に居住する 20 歳以上の男女だが、前回の会議で重要だとわかった高校生の意見は入っていないので、不足しているデータを補完していただきたい。その辺りを掴んで盛り込む必要があると思う。
- 現在、地方創生という国の施策があって追い風になってきている。この追い風の中で県としてどうするかを考えなければならない。
- 今期では若者にポイントを置くことが大切だと言っている。特定の人に焦点を定めることは、他の人が軽くなる側面も持つことになる。それを理解した上で、それでも若者にポイントを置くとなると矛盾が出てくる。この矛盾をどのようにしたら理解してもらえるか。しっかりとした論理が必要になってくるだろう。
- 具体的な事業者、企業、教育委員会、地域のコミュニティなど、組織のことをきちんと盛り込まなければならない。
- 意見の中で出てきた年齢の近いところの組織がヒントになる。また、教育委員会の場合は面白い校長先生がおられると様子が変わってくる。そういった辺りから戦術的にやっていくことも考えられる。
- 兵庫県はトライやる・ウィークが成功した歴史を持っている。こうした実績を活かして若者対象のノウハウを書き込めたら、他の部局にとっても参考になると思う。

### (4) 企画県民部参事挨拶

- 本日は長時間ご審議いただき、お礼申し上げます。
- 次回までに、何らかの形で高校生などを対象とした補完的なアンケートを実施させていただく。
- 第9期で、若い人にもっとふるさとづくりの良さを気づいてもらったらどうか、といったご意見もあり、若者を対象に「ふるさとづくり青年隊」事業を始めた。若者を支援することで、地元自治会や商店街連合会など、いろいろな大人を巻き込むことができて、すごく波及効果があったと感じている。
- 次回の部会までにアンケートを取り、表現が上から目線だといったようなご意見も含めて全体的に洗い直し、提言案をまとめていきたいと考えているので、今後もよろしくお願い申し上げます。